
スイカ割り

SMTN

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

スイカ割り

【Nコード】

N7846A

【作者名】

SMTN

【あらすじ】

積極的に彼氏LOVEの彼女と、何かと超人でちよつとぶつきらばうただけ彼女LOVEな彼氏の、スイカ割りの話。

「ねー、スイカ割りやろ。一発で割れたらご褒美あげるからさっ」

彼女が薄く頬を染めながら言った、そんな台詞で始まった。

黒い布で目を覆われる。

「じゃ、四九回、回って」

「ん」

ぐるぐると、四九回転した。

「うわっ、ホントに四九回回ったっ。冗談だったのにな」

「……」

目隠し越しに睨み付けた。無言の圧力をかける。

「……」っ、ごめんなさい」

プレッシャーに負けた彼女は素直に謝った。

「ん」

俺は大体目安を付けておいた地点まで、躊躇いなく小走した。

「ちよつ、あんなに回つたのに走ってる!？」

驚愕の声が聞こえたが、

「気のせいだ」

と答えておいた。

そして、イメージ上のスイカがある地点の正面に立つ。そして腰を落として力を溜めると、手に持った棍棒を振り上げ――横に薙ぎ払った。

スパンツ、と手応えが返ってきた。命中したらしい。目隠しを外す。

「ええ!？横薙ぎツスカ!？縦、縦!普通縦に振るでしょ!ていうか私、誘導する暇もなかったじゃん!したかったのに!それが楽しみだったのに!」

「いや、横に振った方が命中範囲が広いしな。それに誘導なんかされなくても割れるし」

「……楽しくない。てか横に振るなんてひきよーだよ。ものの3分で終わっちゃったじゃん」

「……チツ、文句あるならもう一回やってやるよ」

そして、俺は出発地点まで戻り、目隠しをし、十回回った。

「うんゝじゃあ誘導しまゝす。えつとねー、そのまま大体五十……」

ひゅ。俺は棍棒を投げた。強烈に回転したソレは、一直線にスイカへと向かい、そして突き抜けた。

「歩。つてええ!？」

「当たった?」

が、スイカを見ると、完全な球体のまま、ビニールシートの上に佇んでいる。後方には、棍棒が砂浜に深々と突き刺さっていた。

「……アレ？割れてないの？」

「大丈夫、割れてないけど……」

言いながらスイカに近付いた。

俺はスイカの蔓を掴み、上に引き上げた。クチャツという音を立て、上半分が持ち上がった。下半分はそのまま。あまりに鋭すぎる断面に、赤い果汁など一滴も零れない。

「斬れてるから」

「棍棒で！？」

三十秒で食い終わった。

「早っ！てか種は！？」

「飲んだ」

「飲っ……！？」

「え？」

「そこに疑問！？」

うゝむ？なんか変な事したか、俺？

「……で、ご褒美つてのは？」

「……あっ、そうだったね。ハイ」

言って、目を閉じてこつちを向く。

「なんの真似だ」

「……だから、ご褒美だよっ」

「阿呆か」

「………ううっ………酷い………」

あっ、マジ泣き。

……これはどうしたものか。

「………」

シャク、とスイカを口に含む、隣で泣く彼女。

「……じゃあ、スイカよこせ」

「……私のキスよりスイカの方が良いんだ………」

そしてまた、スイカを口に含んだ。

「うつせえな」

ガシッ、彼女の頭を掴むと、グルンッ、強制的にこっちを向かせた。

「ぐえっ」

彼女は急激に首を回された事で、潰れたカエルの様な声を出した。俺はその声が出た箇所から、直接彼女のスイカを頂いた。

「うぶっ!？」

「……ん。ごちそうさまでした」

ニヤリ、と笑う。俺の唇に付いた赤い果汁を、ペロリと舐めてみせた。

「……………おっ、お粗末様でしたっ！」

頭から湯気を出しながら、かすれた声を出す彼女。

……………なんだかんだで、酷く可愛らしい。

彼女は俺が笑いながら彼女を見ている事に気付くと、更に顔の色彩を鮮やかに染め、そのままスイカを放り投げ、何処かへ走って逃げていった。

「あつ、馬鹿、食い物を粗末にすんなっ」

咄嗟に腕を伸ばして、スイカが地面に付く前に捕獲した。
そのころにはもう彼女の姿は無かった。

「……………」

手の中には、彼女の食べかけのスイカ。

「……………」

シャクッ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7846a/>

スイカ割り

2011年1月21日00時55分発行